

<<東北魂>>を鼓舞する
電子新聞

発行所 株式会社遊無有

〒207-0005
東京都東大和市高木3-315-1-2-2
http://www.yumuyu.com/
e-mail:yumuyu@wj8.so-net.ne.jp

東北復興

Rising up, TOHOKU!

2014年(平成26年)7月16日 水曜日

無料

第26号

毎月発行

創刊2014年(平成26年)7月16日 水曜日

旧来型観光産業は論外 では新観光とは何か？ 東北でしか体験できないこと それってなんだろうか？

これまで当新聞では何回かに亘り、3・11以前でも長期凋落が続いている東北3・11でさらに凋落を余儀なくされる可能性大の東北を浮揚させる産業のひとつとして、新たな東北観光産業の可能性を考えてきた。今回はさらに具体的にその可能性を探るため、実際に東北各地に赴きつつ、新たな東北の魅力掘り起こしを考えてみようと思った。

ひとくちに、新たな東北の魅力といっても、表現するとは簡単ではない。そもそも東北の魅力といえるものを絞り込むのもむずかしい。というのも、単刀直入に言えば、東北の魅力がいつもむき出し状態で、だれのものにも明らかだという訳ではないからだし、さまざまに雑物が堆積している表層を一旦払い除けないと新たな魅力の掘り出し作業もままならないと思われるからである。簡単に言えば、そうした魅力はまだ埋もれた

ままなのである。また、国内の旧来型観光産業はずっと衰退気味である。あちこちの観光地は閑古鳥が鳴きつばなしである。したがって、他地域の旧来型観光モデルのなかに東北の観光資源をあてはめ、比較して論じてあまり意味はない。今後周回遅れでキヤッチアップを試みても徒労に終わるだけである。必要なのは今までの枠組を大きく超えるような新たな観光産業の形であり、観光資源であり、端的にいえば、旧来型観光に飽き飽きしている観光客あるいは潜在観光客のニーズに合致する観光の可能性を探ることである。

それはたびたび耳にしたことがある。いわく、「感動」であり、「一生の思い出」などだという。観光してもすぐに忘れてしまうような旅ではなく、記憶に残り続ける旅だという。しかしよくよく考えてみれば、それらはすでに少なくとも旧来型「観光」の枠を大きくはみ出している。かつ「観光」というよりは、むしろ「新たな体験」を追求することであり、旅を通して「新たな自分との出会い」を求めるものである。あわよくば、「いままでの自分の殻を脱ぎ捨てること」でもある。参加者が予想もしないような未知の

体験をすることである。そうしたものを、そうしたことを東北新観光産業は提供できるだろうか？ そんなことで今回の企画がスタートした。最初のきっかけは、6月22日に開催された『遠野郷八幡宮 太鼓踊系鹿踊奉納』という岩手の郷土芸能企画への参加であった。(詳細は1面下から2面を参照)

3・11以降、沿岸被災地の人々の復興にかけけるエネルギーと郷土芸能の持つ力の関係に注目してきた。沿岸被災地で長年継承されてきた郷土芸能が、被災で何もかも失った被災者の方々の再起へのエネルギーを充電してくれるということに感銘を受けたのだ。そのうち、被災した三陸沿岸部だけでなく、内陸にも素晴らしい郷土芸能があることが分かり、友人・知人のサポートで、さまざまな祭に参加してきたのだが、こうした郷土芸能は地元の人々の神事として行われるのである。それと観光はどう結び付くだろうか？

そのほかにも、秘湯と言われる岩手県の温泉、秋田の温泉、さらには山形まで足を延ばして、新たな観光資源につながる可能性のある場所を探索した。そして、それらは三泊四日のミニ東北一周弾丸ツアー計画となっていたのである。

① 史上初の試み—鹿踊の交流 『遠野郷八幡宮 太鼓踊系鹿踊奉納』 行山流舞川鹿子躍・東京鹿踊 小岩秀太郎氏寄稿



神社への奉納

筆者はフェイスブックユーザーである。あの震災があつて、このSNS(ソーシャルネットワーク)キングダム(サービス)は爆発的に流行した。バーチャルなものであ

ろん問題もあるが、今まで出会えそうで出会えなかった、話したくても話す機会のなかった人たちの繋がり、機会を提供し、「枠」を越える同志が少しずつ集まり始めた。同志が集まれば一つのカタチを作りたいたいというのとは性というもので、ここから今回の一大プロジェクトが始まったのかもしれない。



行山流舞川鹿子躍(一関市)

筆者は岩手県一関市出身で郷土芸能「鹿踊(ししおどり)」の踊り手であり、好きが高じて「鹿馬鹿」というハンドルネームを濫発しては鹿踊のアレコレを世界に発信し続けている。さて、一関を含む岩手県南部のいわゆる旧伊達領仙台藩には「太鼓踊系」と呼ばれる鹿踊が多数伝わっている。このタイプは頭に鹿角



しし踊り4団体記念撮影

を付け、背中に「ササラ」という長い竹を背負い、腰にさげた太鼓を叩きながら歌い踊るもので、地域ごとに大きく3つの流派「行山流」「金津流」「春日流」に分けられる。ルーツや格好、踊りの内容などはほぼ同じ

としても、300年ほどの歴史や地域性、そしてプライドがそれぞれの交流をそれほど活発にはしてこなかった。しかし現在、郷土芸能は過疎や少子高齢化など様々な課題を抱え、また芸能の意義とはなんなのかを

「展覧」から「鹿踊とは何か」という本質的な部分にまで入り込み、鹿踊に直接携わっていたり関係のある人を巻き込みながら「円卓会議」は盛り上がりつつあった。

そんな折やはりフェイスブックで、遠野市の総鎮守「遠野郷八幡宮」の禰宜である多田宜史さん、権禰宜多田梨絵さんご夫妻と幸運にも繋がり、芸能を奉納する側・される側の感覚を共有し合うことが出来るようになった。また、バーチャルの世界だけでなく直接顔を合わせてのリアルな交流が人間関係を構築していった。

このような関係をさらに深めたエピソードがある。春日流八幡鹿踊の藤原さんが単身で遠野郷八幡宮に向き、鹿踊の太鼓と唄を奉納したのだった。

現代の風潮として、特に岩手県内陸部では郷土芸能イベントと捉えられがちである。今回の企画は確かにまだ誰も挑戦をしたことのない新しいカタチではあるが、イベントではない。その意義をはっきりと奉納する側と受け入れる側両方が肌で感じてもらうための試みを、それぞれの知見を

いずれにせよ、大変なことを仕出かしてしまっただけではないかと未だ気持ちの整理が付かず上手く表すことが出来ないのだが、これまで一緒に話を進めてきた同志である3流派の鹿踊団体に加え、地元遠野市で唯一の太鼓踊系「行山流湧水鹿踊」と一緒に奉納

し交流が出来たこと、エンターテインメントではない「奉納」部分や鹿踊をやっている個人に対して興味を持つ人が多数おり遠方から足を運んでくれた人もいて、人の繋がりの大切さを改めて感じる事が出来たことは大きな収穫である。そして、比較的若い踊り手が多く参加したこのタイミングで「梓」や「境」を越えた交流が出来たことで、互いに気付き、励み、刺激になり、新たな挑戦への第一歩を踏み出せる勇氣をも与えられたのかもしれない。

鹿踊への魅力は尽きない。おそらく今回遠野に集った人々全てが感じたことだろう。これからもこうした機会や人々の交流の場が多く作られていくことを切に願う。



春日流八幡鹿踊(花巻市)



金津流石関獅子躍(奥州市)



行山流湧水鹿踊(遠野市)

② 生まれ変わる 東北の観光事業

先行者追随ではなく、東北オリジナル観光の可能性を追求する

郷土芸能ざんまい / 秘湯めぐり / 神社めぐり

郷土芸能ざんまい東北

東北三大祭りとして、青森ねぶた、仙台七夕、秋田竿灯は有名で、加えて山形花等踊り、盛岡さんさ踊り、福島わらじ祭を加えると、「東北六魂祭」が出来上がる。でも東北の祭はこれだけではない。それどころか



乳頭温泉 鶴の湯

まだ入口にも来ていない。夏や秋ともなれば、東北各地で数えきれないほどの祭が開催される。その規模もけつして小さくはない。ここ2年続けて見ている岩手の「遠野祭」、昨年初参加の「北上芸能まつり」などは踊り手の数も観客もかなりの規模である。登場する踊りも多種多様で、とても一回だけでは全部を見切れない。また行くたびに新たな発見がある。大都市圏への宣伝が行き届いていないが、宣伝してもとていま以上の観光客を収容できないという事情もある。

最近では温泉ブームである。東北も例外なくその波に乗せられている。また東北にはたくさん温泉がある。なかに秘湯といわれるものも多い。昨年行った「夏油(げとう)温泉」はすごかった。5月過ぎでないと行けない場所にある。しかも残雪がすごい。一番熱い露天風呂は約50度。30秒が限界である。一生忘れられない。それ以外にも岩手は温泉の宝庫で、今年は大沢温泉、瀬美温泉に行った。それぞれ複数の風呂があり、泉質も別々である。特に瀬美温泉のぬるつと肌にとわりつく泉質は印象深い。秋田の乳頭温泉もいい。最も古くて一番人気の「鶴の湯」は行くまでにかかなりの道程となるが、それだけの価値はある。入口の建造物などは大昔にタイムスリップした錯覚を抱かせる。筆者は長湯が苦手である。

唐松神社 天日宮



る。百聞は一見に如かず、行くことをお勧めする。

ふつう神社は高いところにあるが、この神社は低い所にある。また、社は木材だが、人工池に浮かんだ基礎部分は石だらけである。

それに伴い超古代からの種々の信仰継承をみな否定されてきた歴史がある。きっとそうしたことの影響があるであろう。

こうした謎解きも興味あるところであり、ご利益を求めての神社参拝だけではない参拝の仕方のなかに新たな観光の可能性が秘められているのではないかと。

東北には新たな観光の可能性が
開けている

前述の東北の祭・郷土芸能に關しても、従来型の観光ではない、まったく新しい観光という大きな可能性を秘めていると思う。

東北の温泉についてもそうである。湯治場的な旅館に若い人が押し掛ける光景も目にしたことがあるが、それだけではないだろう。

謎めいた神社については、その謎を掘り起こしていく作業そのものが新たな観光の可能性を拓くとも考えられる。

あとは、その突破口をどうつけていくかである。

それはともかく、表面だけではなく、ずっと奥深く東北に入り込めば、その魅力に圧倒されることは請け合いだ。あわてずじっくりと、そこから新たな可能性を切り拓いて行けばいい。

そこでは東北人の我慢強さではなく、進取独立性をこそ発揮してみるべき領域であると思う。

東北の神社は

謎だらけ

今回の弾丸ツアーで行った秋田の「唐松神社」の「天日宮」はかなり変わった

しかもいつも弾丸ツアーの途中での温泉で、じっくり湯に浸かることもない。これでは温泉の魅力を語れないだろうが、ひとこと言わせてもらえば、これから先も昔からの伝統の温泉のままでいいのだろうかということがある。

当然、旅館やホテルを建設して収容人員を増やせというのではないが、もっと工夫の余地があるような気がする。それが新観光資源に直結するかどうかは分からないが、素材の良さだけに頼っている感じがしてならない。そこから脱皮して観光新資源になる可能性も秘めていると思うのだ。

まだ確認と言えるほどの根拠はないが、かつてこうした神社には現在のような社がなかったのではないかとと思う。そこはずっと古い時代、今風に言うなら強力なパワースポットで、超古代から神道とは異なる何らかの信仰を集めていたのではないかと思われるのだ。

こうした推理に至った理由のひとつは、こうした神社の由来に謎が多いこともある。たとえば東北の神社の多くが大同二年(807年)という同じ創建年であることなどである。歴史の恣意的な歪曲が感じられる。平安時代初期、アテルイの投降により東北は完全に大和朝廷権力下に入り、



和賀大乘神楽



瀬美温泉 露天風呂



唐松神社 下がった拝殿



雄勝法印神楽



瀬美温泉 玄関



天日宮後の磁鉄鉱石



中野七頭舞



夏油温泉 一番熱い露天風呂



十和田神社 礎石



北藤根鬼剣舞



大沢温泉 露天風呂



胡四王神社

自転車のススメ(前編)



災害時の

避難手段としての

優位性

今年の1月、「宮城県津波対策ガイドライン」が改定された。これは宮城県内の沿岸15市町における津波避難計画、そしてその中の地域ごとの津波避難計画の策定に向けた指針となるものである。同ガイドラインでは、避難の方法は原則徒歩とし「徒歩による避難が可能な方は、自動車で避難しないこと」を徹底することが示されている。一方で、歩行困難者が避難する場合や、想定される津波に対して徒歩での避難が可能な距離に適切な避難場所がない場合のような、自動車での避難を検討せざるを得ない場合については、地域の実情に応じて自動車を利

用した避難を検討することもある。同ガイドラインでは、避難の方法は原則徒歩とし「徒歩による避難が可能な方は、自動車で避難しないこと」を徹底することが示されている。一方で、歩行困難者が避難する場合や、想定される津波に対して徒歩での避難が可能な距離に適切な避難場所がない場合のような、自動車での避難を検討せざるを得ない場合については、地域の実情に応じて自動車を利

用した避難を検討することもある。同ガイドラインでは、避難の方法は原則徒歩とし「徒歩による避難が可能な方は、自動車で避難しないこと」を徹底することが示されている。一方で、歩行困難者が避難する場合や、想定される津波に対して徒歩での避難が可能な距離に適切な避難場所がない場合のような、自動車での避難を検討せざるを得ない場合については、地域の実情に応じて自動車を利

用した避難を検討することもある。同ガイドラインでは、避難の方法は原則徒歩とし「徒歩による避難が可能な方は、自動車で避難しないこと」を徹底することが示されている。一方で、歩行困難者が避難する場合や、想定される津波に対して徒歩での避難が可能な距離に適切な避難場所がない場合のような、自動車での避難を検討せざるを得ない場合については、地域の実情に応じて自動車を利

用した避難を検討することもある。同ガイドラインでは、避難の方法は原則徒歩とし「徒歩による避難が可能な方は、自動車で避難しないこと」を徹底することが示されている。一方で、歩行困難者が避難する場合や、想定される津波に対して徒歩での避難が可能な距離に適切な避難場所がない場合のような、自動車での避難を検討せざるを得ない場合については、地域の実情に応じて自動車を利

用した避難を検討することもある。同ガイドラインでは、避難の方法は原則徒歩とし「徒歩による避難が可能な方は、自動車で避難しないこと」を徹底することが示されている。一方で、歩行困難者が避難する場合や、想定される津波に対して徒歩での避難が可能な距離に適切な避難場所がない場合のような、自動車での避難を検討せざるを得ない場合については、地域の実情に応じて自動車を利

用した避難を検討することもある。同ガイドラインでは、避難の方法は原則徒歩とし「徒歩による避難が可能な方は、自動車で避難しないこと」を徹底することが示されている。一方で、歩行困難者が避難する場合や、想定される津波に対して徒歩での避難が可能な距離に適切な避難場所がない場合のような、自動車での避難を検討せざるを得ない場合については、地域の実情に応じて自動車を利

用した避難を検討することもある。同ガイドラインでは、避難の方法は原則徒歩とし「徒歩による避難が可能な方は、自動車で避難しないこと」を徹底することが示されている。一方で、歩行困難者が避難する場合や、想定される津波に対して徒歩での避難が可能な距離に適切な避難場所がない場合のような、自動車での避難を検討せざるを得ない場合については、地域の実情に応じて自動車を利

東日本大震災における津波の際の宮城県内の避難行動においては、自動車を利した人が平野部で59%、リアス部で51%と非常に高い割合を占め、自動車がない避難に活用されていたことが分かっているが、同ガイドラインでは「そのために各地で渋滞が発生し、車でしか逃げられなかった

実際、宮城県内の避難実態調査の結果からは、「渋滞して動けなかった」との回答がリアス部で39%、平野部では実に66%に上っている。平野部では、海岸線に並行して走る国道4号線、主要地方道塩釜巨理線、そして沿岸部からそれらの路線へ接続する区間などで渋滞が発生したことが指摘されている。

しかし、同ガイドラインでは、避難開始時間を地震発生後から15分後とし、そこから徒歩での避難可能距離を500mとしている。これも今回の津波における避難実態調査の結果を踏まえたものだが、大きな問題が残る。居住地に隣接して高台のあることが多いリアス部に比べて、平野部には避難可能な高台がないのである。500m歩いて安全な高台にたどり着ける地域

は、リアス部はともかく、宮城県の平野部にはほとんどないのでないだろうか。今回の津波では、津波を遮るものがない仙台平野は海岸線から実に4km近くもの範囲が津波によって浸水した。そのことから見ても、沿岸に住んでいる人が徒歩で500m避難しただけでは安全な場所にたどり着けない可能性が高い。もちろん、津波避難ビルの指定なども同時並行して進められるだろうが、すべての人が安全に避難できるほどの多くの津波避難ビルが沿岸にできるとは考えにくい。

かと言ってこうした平野部の人がみな車で避難してしまえば、またしても今回の津波と同様の交通渋滞を引き起こすことになる。そこで私が提案したいのが、自転車の活用である。車よりは遅いが、徒歩よりははるかに速い。渋滞を引き起こすこともまずない。

ガイドラインでは、徒歩による避難速度は1.0m/秒を目安とすることが記されている。一方、自動車による避難速度は3.0m/秒(時速約11km/h)

「自転車発電」の利用法

電動アシスト自転車についてはもう一つ、「発電」によるメリットも考えた。あの震災直後、大いに困ったことの一つとして停電がある。停電によって石油ファンヒーターなどの暖房器具が作動しない、給湯器が作動しない、といったことにも困ったが、携帯電話のバッテリーの充電ができないことで情報から遮断されたことも困ったことであつた。

執筆者紹介

大友浩平

(おおくほへい)

奥州仙臺の住人。普段は出版会社に勤務。東北の人と自然と文化が大好き。趣味は自転車と歌と旅。

「東北ブログ」

http://blog.livedoor.jp/anagmasi/



Facebook
https://www.facebook.com/kouhei.ohtomo

「東北ブログ」

「東北ブログ」

「東北ブログ」

「東北ブログ」

「東北ブログ」

「東北ブログ」

「東北ブログ」

連載
むかしばなし

芭蕉のむかしばなし

第十四話
天界の穀物

戦の前の静けさに包まれた陸奥国分寺、十二畳の部屋に敷かれた質素だが清潔な布団に独り、少女が横たわる。

若は、夢の中で何者かとの戦おうとしていた。夢の中の自分は信じられぬほど身体に力がみなぎり、若い女には違いないのに、「敵」への殺意に燃えている。その敵、もまた、女であるのだ。

自分がこれ程、凶暴な感情を持った事があるだろう



奥羽越現像氏紹介

一九七〇年山形県鶴岡市生。札幌、東京を経て、仙台に移住。市内のケルト音楽サークルに所属し、あちこち出沒し演奏する。フィドル(ヴァイオリン)担当。

か?という疑問が一瞬よぎるも、次の瞬間にはそれは掻き消え、まるで当然の事のように、少女は戦士の如き心持に浮き立っているのだ。これは個人の恨みではない、何かもっと大きな、一族や、国家などといったものを背負った者同士の戦いだ、という感覚があった。とても禍々しい、なのに懐かしい、随分久しく失っていた自分を戻した気がしていた。

若は濃い霧に囲まれた草原に立っていた。強い風が吹いているのに霧はなかなか晴れなかった。風に流れるのは若がそれ程伸ばして来たはずのない、非常に長い髪と、重く着重ねた、丁寧に織られた衣である。ふと、霧の向こうに人らしき影が見えた。男性の狩衣姿であるが、よく見るとその顔は、女性の線を残した老人である事がわかる。相手に気づいたのは自分が早かったが、少女もまた、こちらの視線を感じたようにふっと見返してきた。「あ・こ・や・・・転生したのだな・・・近くにいなのだな・・・」

少女が目を見開き、よく通る大きな声でそう言うの

が、風の中ではつきり聞こえた。

それより一里足らず西北。もうひとりの少女が、泰衡と名乗る武將に促されて竪穴式に近い小屋の中を覗き込んでいた。中には何やら巻物のような物が一箇所に積まれ、意外にも木の床があつて作業机も見えた。

何か書きかけで広げられたままの巻物が机にあり、また円錐型の茅葺の天井から何か文字の書かれた黄色い麻布がぶら下がっている。少女はそれを見上げて立ち尽くしていた。祝魚も外から、地に伏したまま中の様子を覗くと、その布には見た事もない、奇妙な文字らしきものが並んでいるのだった。「一体何なのだ、あの童子・・・」

眉を顰める祝魚に、「トヨさんは、古代から死しては甦り続けてきた女人なのだ。」と、到底信じられない事を、泰衡が言うのである。「よ、甦る、ですと・・・」

長里、息も詰まらんといい驚きようである。「勿論、わしも今の今まで

信じられなかった。祖父、父、と代々聞かされてはいたのだが。「だとも、なして童子の姿だか。婆だったのではないのか。」

「トヨさんは死した途端に、十三歳の肉体で蘇生される。記憶も、十三の歳までしか、無えのだ。」

「庵」の中では、天井から吊るされた麻布から目を離した少女が、机に積まれた巻物の、一番上にあつた一巻を手にとって、紐解き、広げ始めていた。「トヨさんの遺した、覚え書きか・・・」

泰衡は推測する。澄んだ、鋭い視線を巻物の上を走りながら、少女は口を開き、片言の言葉を発した。「ヒノモト・ヤマト・・・エミシ・ヒライズミ・・・」

そして、ゆっくりその視線は、泰衡の視線に重なる。平泉の棟梁は、無言で頷いてみせるのだった。

「・・・周囲の者に害が及ぶのは耐えられませぬ。害ならばどうか私自身に。」

「宮澤さん、何をおっしゃっているんです。」

純三が驚いて、問う。賢治の表情は今までになく陰しく感じられるのだった。「昔も今も、岩手、東北は冷害に見舞われ、農民の生活はひどい有様です。稲よりの地にふさわしい、強い穀物がどうしても必要なのです。」

佐々木喜善が拳手した。「宮澤さんが行かれるのなら、私も一緒にしたい。」

賢治は熱を込めて言いかけたが、また突然やめた。

大崎八幡方向へ登り、右へ折れてトヨの庵、があるという東の崖へ向かう。

芭蕉とヤエトの後を、賢治と喜善が歩き、続いて今純三、少し後ろをサーカスの壇老人がぼくぼくと追う。残る大寺、横野、柏の姿は、もう随分後ろである。芭蕉は、もう何も言わなかった。ここからはもう、自分ですら何も把握できず、予測もできぬ世界なのだ。

「確かに、岩手の・・・東北の農民の暮らしは、ひどいものです。」

喜善が、賢治に言う。「村長の柄でもない私なりに、村を良くしようと策を練ったのですが、どうも理想主義が過ぎたようです。仕舞いには、彼らの抗議の声が怖ろしくて仕方なくなつてしまつて。」

賢治は、苦笑を返した。「学校で農業を教えていても農民は救えない、と思いつた。昨年教師を辞めまして、肥料設計やら、作付指導やらしているのですが、昨年の天候不順には全くお手上げで・・・気が狂うかと思ひました。」

「この先がおそらく、七百年後に西公園ができる場所なので、まさに今回私も行くつもりでした、産業博覧会の会場です。」

博覧会など想像もつかない、原野が広がるばかり。ちょうど定禅寺通りがで

きる辺りだろうか、大寺から三人が立ち止まり、ついて来なくなつた。ここから東へ、汽車の車庫へ戻ると決めたのだろう。そして、芭蕉ら六人の目の前には、西公園となるであろう緑濃き林が立ち塞がっていた。

賢治が話題を変える。「この先がおそらく、七百年後に西公園ができる場所なので、まさに今回私も行くつもりでした、産業博覧会の会場です。」

賢治は、苦笑を返した。「学校で農業を教えていても農民は救えない、と思いつた。昨年教師を辞めまして、肥料設計やら、作付指導やらしているのですが、昨年の天候不順には全くお手上げで・・・気が狂うかと思ひました。」

国衡は陣を解散し、山を降り始めた。大河太郎は立ち尽くしたまま、国衡に言う。

「大河次郎殿の事でござるが・・・」

国衡が振り向く。「あの御仁はもともと、西木戸様の身代わりとして育てられた御身でござらう。ならば、その肉体を奪い奉つた某が、貴殿の身代わりを務めるは道理。」

「何を言うか。貴様が雷神に敗れたならば、その身体無傷のまま、次郎に返上せよ。貴様のその、神通力も揃えてな。」

大河太郎は、動かぬ山のようであるが、明らかに迷い、逡巡していた。

二十数年前の事だ。若き国衡が、同年代の武人・出羽の大河次郎兼任とともに馬で宮城野を訪れた。奥羽の中でも猛者と言われた両者がここに来たのは、烏鬼森の鬼退治の為にあつた。ここでは多くの男女、子供が鬼か天狗にさらわれていて、と報告されていたのだ。

人攫いなど身に覚えはなかったが、この只ならぬ両雄に惹かれしやしり出ていったのが大河太郎であつた。当時は名取太郎と言ひ、烏鬼森に住んでいたが、実は不思議な事に、顔も手足も持つておらず、森の上の祠に魂だけが宿つていて、大河次郎兼任に言つた。

「俺に負けたり、その見事な体躯をよこすべし。」

決戦は、深夜に定めた。夜にのみ、名取太郎が森の霊力によって、仮の肉体を持つ事ができたからだ。その姿は森の葉、倒木、岩石を集めた恐るべき巨人であり、大河次郎のいかなる攻撃も歯が立たなかつた。次郎兼任は敗れて魂を祠に封じ込められ、名取太郎は暗れて羨望の肉体を獲得したのだった。

次の相手は国衡である。この男は奥羽の王・藤原秀衡の息子であり、黄金の都・平泉に屋敷を構えている。それを戴くとしてしよう。しかし、国衡も言い返した。

「俺が勝つたら、家臣となり、奥州藤原に忠誠を誓え。」

突如、女の叱るような鋭い声が出て、大河太郎は我に帰つた。阿津賀志山に既に鎌倉の兵が来襲し、もぬけの殻となつた国衡の城塞は、完全に包圍されていた。「今の声・・・阿古耶?いや、そんなはずは・・・ない。」

矢尻に山刀を差した槍を背より引き抜き、大河太郎は敵を迎え撃つたのだった。

次回予告
阿古耶とは、一体何者なのか?そして昭和初期、芭蕉の辻にあつたお菓子会社とは!

次回予告
阿古耶とは、一体何者なのか?そして昭和初期、芭蕉の辻にあつたお菓子会社とは!



雨に煙る千葉家

シリーズ 遠野の自然 「遠野の初夏」 遠野 1000 景より

遠野の6月は下旬ともなれば、春というよりも初夏である。7月に入れば真夏で、遠野は短い春から一挙に夏に移る。

筆者は、6月下旬、遠野を訪ねた。3年連続3回目の訪問となる。遠野に行くのと、その出身でもないのになぜかとても懐かしい感じがする。

今回の訪問は「遠野郷八幡宮 太鼓踊系鹿踊奉納」という神事があり、それを

見に行くためだった。

遠野にはたたくさんの「しし踊り」(※流派によりさまざまな記述があるためひらがな表記とした)の流派があるが、その大半は「幕踊系」といわれるもので、太鼓は別の人が敲き、シカの頭部を模した鹿頭より垂らした大きな布で踊り手を覆っているのが特徴である。

一方で「太鼓踊系」という一派があり、こちらは踊り手が腹につけた締太鼓を敲くのが特徴である。

この後者の「太鼓踊系」の「しし踊り」が、「幕踊系」の本場である遠野の神社に踊りを奉納するというのが今回の催しの内容で、なかなか見込えがあった。

この紙面では「幕踊系」流派の写真を2枚掲載した。

◆ 今回の遠野訪問では、遠野の歴史も学ぼうと市立博物館も訪問した。映像が多用され、すんなりと遠野の歴史に入り込めた。これとは別に、縄文土器展示館にもおじゃました。

遠野といえは何と云って

も「遠野物語」博物館で「遠野物語」の歴史的なバックグラウンドが理解できる。そして遠野で多くの郷土芸能が途切れずに継承されているのかも分かってくる。

伝統を頑なに守りつつ、一方で、型にとらわれることなく、遠野のまち全体で、生きた伝統を継承していることが、他地域では失われ

た古きよきものを思い出させてくれるのである。

◆ 「しし踊り」以外にも遠野に伝承されている郷土の祭りから、「馬っこつなぎ行事」と「百姓踊り」、それに何かの神事での「神馬」の後ろ姿を掲載した。

「馬っこつなぎ行事」とは、毎年6月に行われる行事。馬は神様の乗り物と云われており、秋の豊作を祈り、収穫まで米の病気や自然災害に遭わないように水田の水口に馬の姿を印刷したものを差し立てて祈願する行事である。

「百姓踊り」とは、昭和50年代に稲作が機械化されるに伴い失われつつあった昔の農作業の様子を次世代に伝えようと地元で考え出された踊りとのことである。新しい祭である。

◆ 遠野には他にも多くの郷土芸能がある。秋の「遠野祭」で一同に会する。

千葉家は岩手県遠野市にある歴史的建造物である。江戸時代の南部地方特有の住居と馬屋を平面し字形に連結した農家建築「曲り家」を代表する建物として知られている。今回訪問しようと思ったが、時間が取れず叶わなかった。いつか行ってみたい。

◆ 最後は見事なシャクヤクの花で締めくくろう。極薄の花びらと光とが造り出す高貴で濃密な空間がいい。



神馬



馬っこつなぎ行事



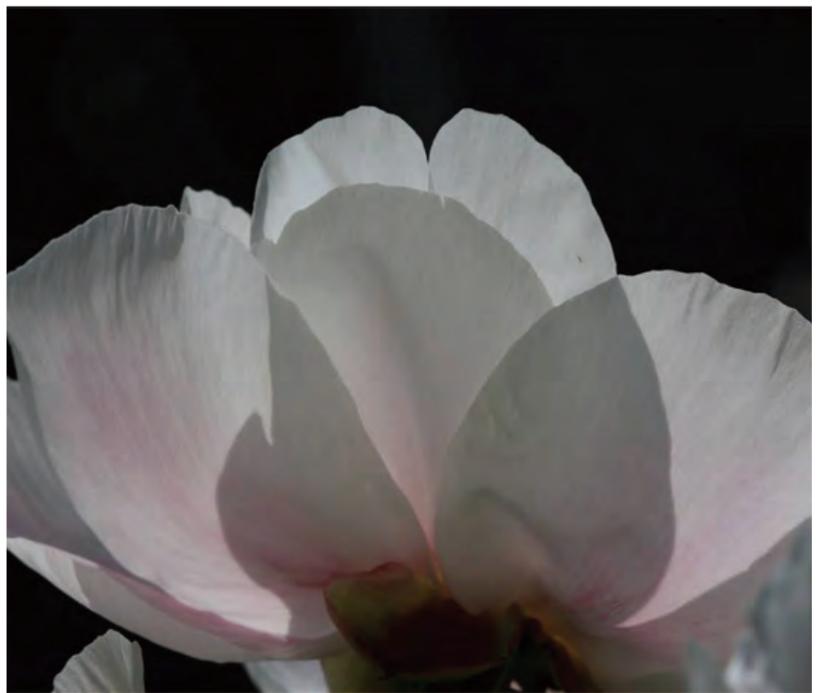
しし踊奉納



百姓踊り



しし踊



シャクヤク

～東北地ビール紀行～

その⑧ 最終回

東北の ビールイベントと 限定ビール

これから盛り沢山の ビールイベント

昨年の6月16日に出た第13号以来、隔号で掲載してきた「東北地ビール紀行」だが、前回の福島県編で東北六県すべてを紹介できた。第1回でも少し紹介したが、今回は補遺として今年の東北各地のビールイベントや東北に関係するビールについて紹介していきたいと思う。この記事が出る頃には既に「東北地ビール祭」「東北地ビールフェスティバル in 秋田」「東北オクトーバーフェスト2014」「世界のビールと肉祭」「ベルギービールウィークエンド仙台」などは終了してしまっているが、夏本番を迎えるこれからの時期、ビールのイベントが東北各地で盛り沢山である。

7月の ビールイベント

まず、7月18日(金)から20日(日)、福島市のJR福島駅東口の中合ツイン広場で「ビアフェスふくしま2014」が開催される。全国の70数銘柄の地ビールが揃うビールイベントで、すべての銘柄が1杯(410ml)600円で飲める。地元の食材を使った料理も楽しめる。

7月19日(土)、20日(日)は秋田県湯沢市柳町のイベント交流広場で「ドイツビールフェスティバル in 湯沢」が開催される。昨年初めて開催されたビールイベントで、当日はビクトールガー・プレミアム・ピルス、ケストリッツァー・シユヴァルツビア、エルディンガー・ヴァイス・ビア・ヘーフェが飲め、またドイツビールに合う湯沢市の食材を使った料理も味わえる。今年は毎年恒例の「たんせ市」に「湯沢・酒まつり」と「ドイツビールフェスティバル」が加わる形で、「ゆざわの休日・夏2014」として開催される。

同じ19日(土)、20日(日)、秋田県仙北市田沢湖町の田沢湖ビールレストランでは「田沢湖ビール祭り」が開催される。年に1回開催される田沢湖ビールのイベントで、期間中は田沢湖ビールが全品半額で飲める他、期間限定のおつまみも登場する。

7月23日(水)から27日(日)は福島県郡山市の開成山公園自由広場で「サマーフエスタ2014(ペーブル祭)」が開催される。こちらは大手メーカーのビールのみイベントだが、今年で20回目を迎えるという歴史と、会場5000人収容という規模は東北屈指である。前売券2000円、当日券2500円で、入場料とビール引換券2枚と1000円分の金券がつく。

8月22日(金)から24日(日)には岩手県一関市の一関文化センター前広場で「第17回全国地ビールフェスティバル in 一関」が開催される。全国各地の地ビールが一堂に会する、東北を代表する一大ビールイベントである。今年で17回目と、東北のビールイベントでは郡山の「ビール祭」に次ぐ歴史を誇る。昨年は全国60社、約150種類のビールが揃った。当日はLサイズ(約300cc)400円、Mサイズ(約200cc)300円とリーズナブルに各地のビールが楽しめる。また、前売りでLサイズ6枚綴シートとMサイズ8枚綴シートがそれぞれ2000円で販売される。地産地消を意識した地元店舗の料理も楽しめ

る。翌週の8月30日(土)、31日(日)には秋田市のJR秋田駅前アゴラ広場大屋根下で「クラフトビアフェスティバル in AKITA 2014」が開催される。一関の全国地ビールフェスティバルや福島のビアフェスふくしまと同様、全国の地ビールが揃うビールイベントである。昨年は全国53醸造所のビールが集まった。

9月以降の
ビールイベント

ビールの本場ドイツ、バイエルン州の州都ミュンヘンでは、9月下旬から10月上旬にかけて、「オクトーバーフェスト」という世界最大規模のビールイベントが開催される。そのオクトーバーフェストが数年前から日本の各地でも開催されるようになってきた。9月19日(金)から28日(日)には、仙台市の錦町公園で「仙台オクトーバーフェスト2014」が開催される。仙台で年2回開催されるオクトーバーフェストの「後半戦」で、例年9月の方が規模が大きく、ビールの種類も料理の種類も多い。いろいろなドイツビールや地ビール、それに地産地消を意識した料理が楽しめる。「オクトーバーフェスト」は仙台以外でも開催される。秋田市のエリアなかいちにぎわい広場で行われ

る。「秋田オクトーバーフェスト」も、現段階で日程は未定ながら今年も10月の開催が決定している。ドイツビールと秋田県内3社の地ビールが味わえる。他に山形市や青森県弘前市でも昨年同様イベントが開催されるが、今年も恐らく開催されるものと思われる。

他に、各地のホテルやデパートではこの時期ビアホール、ビアガーデンが設置されるが、その中では9月6日(土)まで開催されているホテル東日本盛岡の「ビアホール2014」を推したい。私にとって既存のビアホールで何が不満かと言えば、「ビア」の名を冠しながらビールの品揃えが貧弱なことである。これに対してホテル東日本盛岡のビアホールでは3時間飲み食べ放題で、飲み放題のメニューの中には、銀河高原ビールのヴァイツェンの樽生がある他、今年東北産のホップを100%使用した東北限定の「サッポロ生ビール黒ラベル」「東北の恵み」の樽生も登場するなど、ビールの品揃えが他のビアホールとは一線を画している。食べ物の方も同ホテルの和食、洋食、中華の各料理長のオリジナルメニューなど30種類のフードが食べ放題である。料金

は前売り5000円、当日5400円である。また、宮城県角田市で仙南クラフトビールを醸造している仙南ケンケンファクトリーでは、7月から8月の主に金曜日と土曜日に、ビアガーデンを開設している。普段基本的に昼間しか営業していない同ファクトリーだが、ビアガーデンの開設日は夜間に屋外テントが設置され、仙南クラフトビール3種が飲み放題となるビアガーデンプランが登場する。東北の地ビール醸造所で最も駅に近い醸造所で、公共交通機関で行きやすいのもありがたい。秋田市であくまでビールを醸造しているあくらでも、敷地中でビアガーデンを開催中である。これらのビアガーデンでは、「いつもの」ビアガーデンとは違う「ビール体験」ができること請け合いである。

限定で発売されている。このビールのホップは、岩手県の軽米町、岩手町、青森県の田子町、三戸町で栽培されたもので、東北産ホップの特長である華やかな香りに秀でているとのことである。

また、キリンビールが6月からギフト限定で発売した、「二番搾りプレミアム」は、ホップの名産地である秋田県大雄産ホップ「かいこがね」の第一等品を使用し、「プレミアム」の名にふさわしい、「深く華やかな香り」を実現したとして

「東北の恵み」や「一番搾りプレミアム」に共通しているのは、東北のホップを使用したということが商品の最大の売りになっていること、そして東北のホップを使用したことにより「華やかな香り」をビールにもたらしていることである。これは東北のホップの特長としてこれからは大事にしていくべき要素である。

加えて言えば、東北のホップの更なる多様性も追求していかなくてはならない。使用しているホップによってビールの味や香りが変わってくる。現在、日本だけでなくアメリカやイタリアでも地ビール(クラフトビー

ル)醸造所が様々なスタイルのビールを生み出している。そこではビールの性格を大きく左右するホップの選定が重要な意味を持つ。醸造所は、造ろうとしているビールにふさわしいホップを、それこそ世界中から調達している。そしてここでは、既存の伝統的なホップだけでなく、新しい品種も積極的に使用している。そこで、東北でも品種改良などを通して、「華やかな香り」を持ったホップだけでない、多様なホップを生産し、国内はもとより海外にも販路を拡大してはどうかと思う。

以前、北海道でサッポロビールが「ソラチエース」というホップの新品種を開発したことがあった。このソラチエース、残念ながら日本のビールの嗜好には合わない判断され、サッポロビールで使われることはなかったが、海外ではその特徴的な香りや苦みが好まれ、かなり使われるようになってきている。この事例など、学ぶべきことが多いように思う。幸い、東北のホップは高品質である。そのブランドイメージを維持しつつ、様々なスタイルのビールに対応できるホップを作れば、東北の名を世界に知らしめることもつながる。

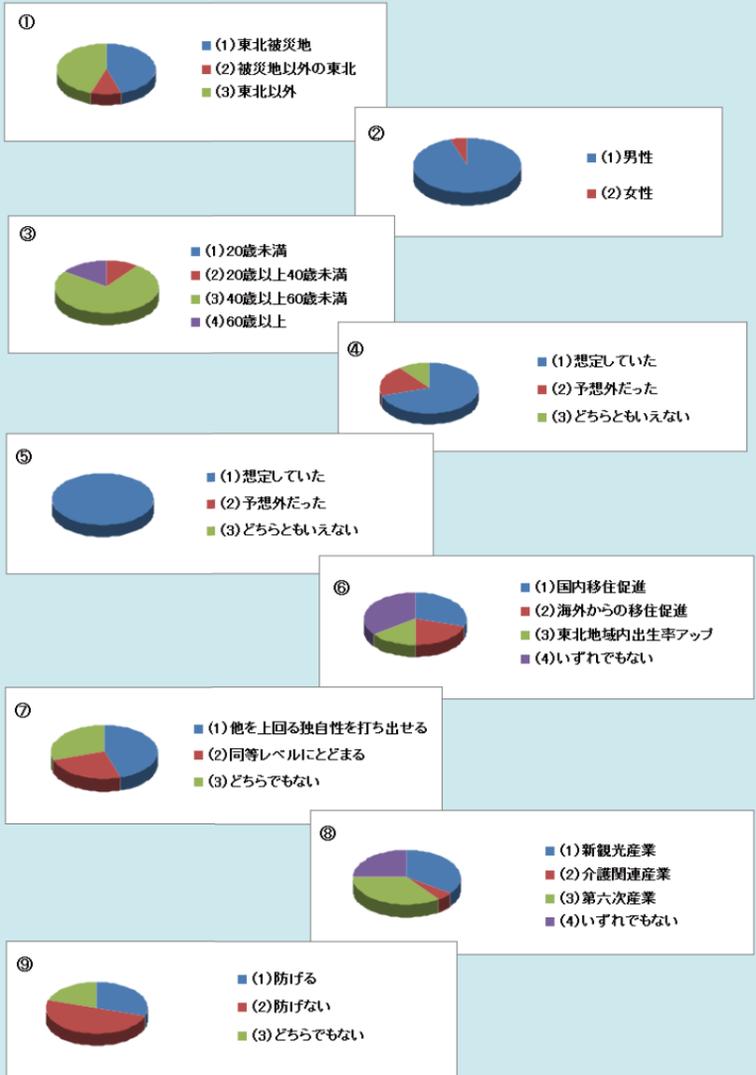
いつか、「東北」の名を冠した新しいホップができることを夢見つつ、とりあえず筆を置きたい。

【東北復興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

第25号 ネットアンケート集計結果

2040年までの東北人口激減を止められるか?

No.	質問と選択肢	回答数
①	住所	
	(1)東北被災地	9
	(2)被災地以外の東北	2
	(3)東北以外	9
②	性別	
	(1)男性	19
	(2)女性	1
③	年齢	
	(1)20歳未満	0
	(2)20歳以上40歳未満	2
	(3)40歳以上60歳未満	15
	(4)60歳以上	3
④	全国市町村の半分が「消滅可能都市」になることについて	
	(1)想定していた	14
	(2)予想外だった	4
	(3)どちらともいえない	2
⑤	東北の「消滅可能都市」率が高いことについて	
	(1)想定していた	20
	(2)予想外だった	0
	(3)どちらともいえない	0
⑥	東北の人口激減対策はどういったものか?	
	(1)国内移住促進	6
	(2)海外からの移住促進	4
	(3)東北地域内出生率アップ	3
	(4)いずれでもない	7
⑦	東北は独自のアイデアを打ち出せるか?	
	(1)他を上回る独自性を打ち出せる	9
	(2)同等レベルにとどまる	5
	(3)どちらでもない	6
⑧	人口激減対策としての東北の新産業とは?	
	(1)新観光産業	7
	(2)介護関連産業	1
	(3)第六次産業	7
	(4)いずれでもない	5
⑨	東北は人口激減を防げるか?	
	(1)防げる	6
	(2)防げない	10
	(3)どちらでもない	4



今回は「2040年までの東北人口激減を止められるか?」でした。日本創生会議によるショッキングな未来予測でしたが、元岩手県知事の増田寛也氏が座長でもあり、何とか頑張れとのエールと解釈しました。それにしてもすごい激減。今後、東北はまさしく一致団結して人口激減を食い止めるかが問われています。回答者数は20名。

「全国市町村の半分が「消滅可能都市」になることについて」は70%が「想定していた」でした。「東北の「消滅可能都市」率が高いことについて」は全員が「想定していた」でした。「東北の人口激減対策はどういったものか?」は意見が完全に割れ、「国内移住促進」が30%、「海外からの移住促進」が20%、「東北地域内出生率アップ」が15%、「いずれでもない」が最も高く、35%。設問に課題を残しました。「東北は独自のアイデアを打ち出せるか?」は、「他を上回る独自性を打ち出せる」が45%、「同等レベルにとどまる」は25%、「どちらでもない」が30%。「人口激減対策としての東北の新産業とは?」は「新観光産業」と「第六次産業」が同率で35%、「いずれでもない」も25%。「東北は人口激減を防げるか?」は残念ながら「防げない」が50%、「防げる」の30%を大きく上回る結果となりました。

第六回 三陸酒海鮮会 日本橋開催 福島浪江の酒『磐城寿』で浪江にもエール



福島浪江の酒『磐城寿』を説明するオーナー

2011年3月11日、浪江町の沿岸部にあった酒蔵、磐城壽(いわきことぶき)は大津波に呑まれ壊滅。その後の原発事故によって、跡地に立ち入ることさえできなくなりました。もう自分たちの酒を造ることはできないのか...と半ば諦めかけました。しかし、たまたま研究用のサンプルとして工業試験所に送っていた山廃酒母が保管されていたのです。唯一残った蔵の魂に涙しました。200ml足らずの液体の中には、流失した酒蔵の歴史、酒蔵の呼吸さえも知る酵母と乳酸菌が生き残っているはず。多くの応援の声にも後押しされ、磐城壽の再興を決意しました。請戸浜の水が元で選る日が来たら、私一人でも請戸で酒蔵を再興するのが最終目標です。

鈴木大介 株式会社鈴木酒造店

HP「ぐくしまの食より」

7月3日、日本橋の「ささや」にて『第六回 三陸酒海鮮会 日本橋開催』を開催した。最近参加者が若干減少気味であったが、今回は19名の参加となり、たくさんのお交流もあった。

飲み放題の東北の地酒のいつもの顔ぶれのなかに、元福島浪江の酒、現在は山形で再興の『磐城壽(いわきことぶき)』も出て参加者であつという間に飲みほした。この会ならではの浪江へのエールである。がんばってほしい。

の後の原発事故によって、跡地に立ち入ることさえできなくなりました。もう自分たちの酒を造ることはできないのか...と半ば諦めかけました。しかし、たまたま研究用のサンプルとして工業試験所に送っていた山廃酒母が保管されていたのです。唯一残った蔵の魂に涙しました。200ml足らずの液体の中には、流失した酒蔵の歴史、酒蔵の呼吸さえも知る酵母と乳酸菌が生き残っているはず。多くの応援の声にも後押しされ、磐城壽の再興を決意しました。請戸浜の水が元で選る日が来たら、私一人でも請戸で酒蔵を再興するのが最終目標です。



平木支店長による乾杯の音頭

編集後記

先月下旬に強行した三泊四日の東北一周ミニ弾丸ツアーであったが、帰ってからの疲労がきつい。一週間ほど体調不良が続いた。年齢のせいかな、思った以上に体力回復に時間がかかる。ツアー最中は緊張のため疲れは感じなかったが、疲労は確実に蓄積していたのである。一晩ぐっすり寝たからといって、昔のように急回復することはないのだとあらためて思った。

それにしてもよくあんなスケジュールを立てたものだ。たまたま出会ったツーリストにスケジュール表をチラリと見せたら、修学旅行みたいだと笑われた。

しかし綿密なスケジュールなしでは、東北の分刻みの電車・列車・バスの乗継ぎはこなせない。乗り遅れたら次がくるまでの待ち時間がすごいことになる。今回、田沢湖で散策しようと思ったのだが、帰りのバス便が二時間ほどない。泣く泣くあきらめ、空き時間徒歩四十分間の弾丸角館めぐりに切り替えた。

また、乳頭温泉の鶴の湯行きでは、旅館の指示で、田沢湖から途中のバス停で降り、迎えを待てという。熊にでも遭遇するようなバス停かと心配したが、山登りの中継地で安心した。

旅はハプニングだらけだが、スリル満点で面白く、これからも止められない。